

ANUUANU

第6回特別展示 “アウタリオピッタ”
アイヌ文学の近代

や え こ い ぼし ほと もり たけ たけ いち
ーバチラー八重子、違星北斗、森竹竹市ー



バチラー八重子



違星北斗



森竹竹市



基本展示室のこの展示を見て! / 博物館 Pickup!

見て見て!館内サイン⑫ / 博物館の教育活動 / 調査研究最前線⑥

国立アイヌ民族博物館からのお知らせ / ウポポイってこんなところ⑨

第6回特別展示

“アウタリオピッタ” アイヌ文学の近代

—バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市—

会期 **2023.6.24(土) - 8.20(日)**

※休館日：月曜日（祝日または休日の場合は翌日以降の平日）
7/10(月)、7/17(月・祝)、8/14(月)は開館、7/18(火)は休館
※新型コロナウイルス感染拡大状況によっては会期を変更する場合があります。
詳しくは当館ウェブサイトをご覧ください。

会場 **国立アイヌ民族博物館2階 特別展示室**

※博物館の入館料は、ウボボイ入場料に含まれます。
※ウボボイ入場料とは別に特別展観覧料(300円)が必要です。

【主催】国立アイヌ民族博物館

【後援】公益社団法人北海道アイヌ協会

【協力】旭川市博物館、違星北斗研究会、沖縄県立博物館・美術館、帯広市図書館、掛川源一郎写真委員会、釧路市中央図書館、市立小樽図書館、市立小樽文学館、仙台藩白老元陣屋資料館、伊達市教育委員会、知里幸恵 銀のしずく記念館、那覇市歴史博物館、日本聖公会北海道教区、北海道大学植物園・博物館、北海道大学附属図書館、北海道博物館、北海道立図書館、北海道立文学館、盛岡市先人記念館、森竹竹市研究会、よいち水産博物館、余市町立大川小学校、立教小学校、立教大学図書館(五十音順)

プロローグ ウタリのために

19世紀後半、同化政策のもと設置されたアイヌ民族の児童を対象とした学校では日本語での教育が行われました。1910年代以降、アイヌ民族による出版物があらわれます。知里幸恵の『アイヌ神謡集』と同時代の1920年代にはジョン・バチラーを中心とした雑誌『ウタリグス』が発行され、多くのアイヌ民族がそれぞれの思いを主に日本語で発表しました。



知里幸恵編『アイヌ神謡集』

ドキュメント 掛川源一郎のまなざし

掛川源一郎(1913(大正2)年~2007(平成19)年)は室蘭に生まれ、千葉で学んだ後に伊達で教職の道につきました。その傍ら、戦後のリアリズム写真運動の流れを受けた写真家として、雑誌への投稿や個展を開催するなど活躍しました。残された写真の数々には、源一郎のファインダーを通した、北海道やアイヌ民族へのまなざしが刻まれています。



掛川源一郎(左)とバチラー八重子(右)
掛川源一郎写真委員会蔵

第1章

バチラー八重子 —ウタリへの慈しみ—

1884(明治17)年~1962(昭和37)年
伊達生まれ



バチラー八重子
伊達市教育委員会蔵

ふみにじられ
ウタリの名
誰しかこれを
取り返すべき

8歳の時に司祭ジョン・バチラーから洗礼を受け、その後養女となります。キリスト教の伝道師として活動する中でウタリの苦境に心を痛み、そうした思いを歌に詠みました。歌集『若き同族に』(1931年刊)の出版には、歌人の佐佐木信綱や言語学者の金田一京助の支援がありました。



『若きウタリに』



八重子が集めた
フリルのついた衣服
(木綿)
立教小学校蔵

第2章

違星北斗 —コタンを夢見て—

1901(明治34)年~1929(昭和4)年
余市生まれ



違星北斗 市立小樽文学館蔵

我はただアイヌであると自覚して
正しき道を踏めばよいのだ



『コタン 違星北斗遺稿』

少年時代より和人のアイヌ差別に対する「反逆思想」を抱いていましたが、ある和人教師のひと言から「アイヌの復興」という信念へと転換します。しかし、27歳で肺結核が悪化し志半ばにして永眠。北斗の死後、短歌や俳句、日記などをまとめた『コタン 違星北斗遺稿』(1930年刊)が、彼を支援した人々によって出版されました。

展示会のポイント

アイヌ文学とは
アイヌ民族によって創られる文学(神謡・散文説話・英雄叙事詩・伝説・短歌・俳句・詩・小説など)

アイヌ民族の「近代」とは
明治以降に行われた日本語教育などの同化政策や、和人の大量移住による民族差別などのあつれき、そして激変する生活への対応など、アイヌ民族が離れた地にいるウタリ(同胞)とも横のつながりを持つようになった時代

第3章

森竹竹市 —ウタリと自身に捧げた人生—

1902(明治35)年~1976(昭和51)年
白老生まれ



森竹竹市
喜多章明『北海道アイヌ保護政策史』より転載

半生を自分で使ひし我命
残りをウタリに捧ぐ嬉しさ

青年時代より俳句をたしなんだ竹市は、社会生活の近代化の過渡期に生まれ合わせた「アイヌ青年の心情を、赤裸々に告白」した『若きアイヌの詩集 原始林』を1937(昭和12)年に出版しました。竹市は自らの生活を詠むことで、偏見と闘い、民族の誇りを語り、自立と復権を訴え続けました。



『若きアイヌの詩集 原始林』



竹市自筆の額「アイヌ亡びず」 当館蔵

エピローグ アイデンティティの行方

近代のアイヌ文学は、アイヌ民族が置かれた社会状況を反映したものでした。アイデンティティの観点からみれば、近代のアイヌ文学者たちは、同化を強られる一方で、「滅び行く人種」という通念や差別の現実^{あらが}に抗い、「日本人」や「和人」になることと、「アイヌ」であることとの間で自らの生きる道を模索してきました。

ウタシパノ 仲良く暮さん モヨヤツカ
ネイタパクノ アウタリオピツタ

バチラー八重子

金田一京助は「アウタリ」を「我が同族同胞」、「オピッタ」を「皆々」とし、「今は残り少なくなりはしたれど、相互に仲よく暮らして行かうてはなにか、我が同族の皆々」と訳しました。

イベントの詳細はウェブサイトでご確認ください。



基本展示室のこの展示を見て!

アイヌの狩猟と漁撈を知る

当館の常設展である基本展示室では、「プラザ展示」をはじめとして、

「ことば」「世界」「暮らし」「歴史」「しごと」「交流」という6つのテーマを設定し、

アイヌ民族の歴史や文化に関する資料を幅広く展示しています。

今回は、アイヌ文化における狩猟と漁撈をよりよく知るための展示の見方について紹介します。

各テーマを横断的に観覧することで、アイヌ文化をさまざまな角度から知ることができます。

伝統的な狩猟と漁撈の道具【観覧時間/約10~15分】

伝統的な山猟と漁撈で使う基本的な道具は、「f.1先祖のしごと」で展示しています。

狩猟

アイヌの代表的な狩猟具は①弓と矢です。弓は1m程度であり、和弓と比べ短いのが特徴です。②矢じりにはトリカブトを主成分とする毒が塗られています。③また鹿猟であるアマッポ(仕掛弓)も使われていました。



①弓矢



②毒矢

③アマッポ(仕掛弓)

漁撈

サケ漁では、魚を引っかけて獲る④マレク(突鉤)、海獣猟では、獲物に突き刺し体内で向きを変え、附属の紐で手繰り寄せせる⑤キテ(銚頭)が広く知られています。⑥マネキンにより、伝統的な山猟の装備やマレクによる漁の様子を再現しています。



④マレク(突鉤)



⑤キテ(銚頭)



⑥伝統的な山猟の装備と漁の様子



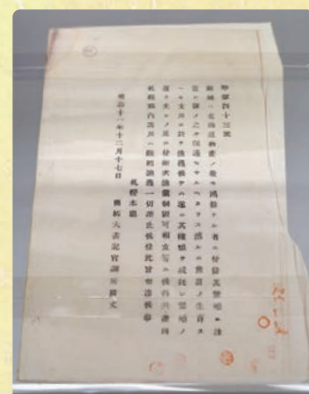
⑦映像「狩猟・漁撈」



伝統的な狩猟と漁撈が奪われる【観覧時間/約5~10分】

明治政府により北海道「開拓」が進められると、アイヌの伝統的な生活スタイルは劇的に変化しました。「プラザ展示」のケースで、狩猟と漁撈の代表的な道具を展示しつつ、伝統的な生業が禁じられていることもあわせて紹介しています。

開拓使はサケやシカの加工品を北海道の産品として重視し、資源保護の観点からアイヌ民族の伝統的な狩猟と漁撈を禁止します。それにより、アイヌ民族は主食を確保することが難しくなりました。サケ漁において河川を仕切る漁法である⑧ウライとテシ網の禁止に関する布達(通知)や、⑨毒矢禁止の延期に関するアイヌ民族からの嘆願書などの資料から、近代のアイヌ民族が受けた深刻な文化的な打撃を知ることができます。



⑧ウライとテシ網の禁止に関する布達(通知)



⑨毒矢禁止の延期に関するアイヌ民族からの嘆願書

儀礼の復興

20世紀後半から始まった儀礼の復興により、サケを獲る儀礼などが現在のアイヌ民族に受け継がれています。近年の活動の様子は「c.3ラマツ(靈魂)について」の⑩映像「さまざまな儀礼」で見ることができます。



⑩映像「さまざまな儀礼」より、「サケを獲る儀礼」

博物館Pickup!

国立アイヌ民族博物館の収蔵、展示資料をピックアップして紹介します。

ヌサ(祭壇)

アイヌの生活において欠かせないものの一つに、儀礼があります。今回は儀礼と関わりが深い、ヌサ(祭壇)について紹介します。

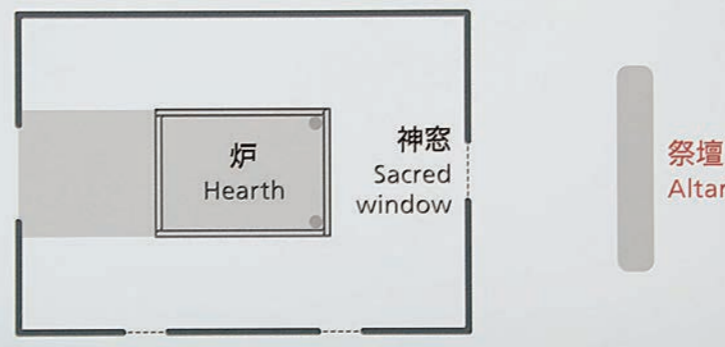
ヌサでは、いろいろなカムイにイナウ(木幣)が捧げられています。イナウの種類や本数などは、地域やイナウを捧げるカムイなどによって違いがあります。ヌサは、チセ(家)にある神窓の外に設置され

ます。チセの東側だったり、川の上流を向いていたりと、地域によって違います。神窓がある付近は、カムイが通るところで、神聖な場所とされています。ヌサで儀礼を行うときには、儀礼に参加した男性がそれぞれ祈りを捧げるカムイを割り当てられ、そのカムイに対して報告や感謝、願いなどを伝えます。

この資料は、北海道大学植物園に収

蔵されている資料をもとに、帯広アイヌ協会の若手のアイヌの皆さんに製作していただいた複製のヌサです。1937(昭和12)年の調査によると、もとの資料は十勝地方音更の中村要吉氏が製作したクマの霊送り儀礼のヌサとなっています。写真左から、ニヤシコロカムイイナウ、カムイモカ、パッカイニ、カムイモカ、タクサ、タクサです。

祭壇の位置 The location of the altar



神窓とヌサ(祭壇)の位置



「私たちの世界」で展示しているヌサ

ニヤシコロカムイイナウはこのヌサ全体を見守るイナウです。アイヌの習慣、やり方を正しく踏襲したかを見ます。カムイモカはカムイがお土産に持つイナウです。熊の頭骨を飾り付けるパッカイニは、二股になった枝の先端の皮を剥いて、そこに頭骨を差し込み、二又の先にイナウをつけています。この

イナウはオスのときは左を少し高く、メスのときは右を少し高くします。タクサは悪いカムイを払い、カムイのラマツ(靈魂)がカムイの暮らす世界まで無事にたどり着けるように守るとされています。

今後も博物館施設などに所蔵されているヌサについて、その地域のアイヌ文化伝承者により復元された資料を展示す

ることを計画しています。このように、現存する資料をアイヌ民族自身が調査研究し復元資料を製作することで、文化伝承としても活かされます。現在、基本展示室の「私たちの世界」にて展示中です。ぜひご覧ください。(学芸員 竹内隼人)

ウロボイのアイヌ語表示について紹介します。

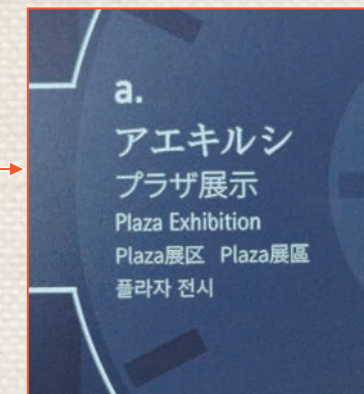
見て見て! 館内サイン ⑫

アエキルシ

プラザ展示

アエキルシは、今から100年前に出版された知里幸恵編の『アイヌ神謡集』(1923年刊)に「目次」という意味で記載があります。当館の基本展示室の特徴のひとつは、中心から周辺へと自由に展示室を回る構成となっていることです。この中心部分がプラザ展示と呼ばれる場所で、6つの展示テーマのエッセンスが集められており、ここを見て、より詳しく知りたい人には周辺の個別の展示を見て理解を深めてもらうという構成になっています。プラザ展示はここを手掛かりにより深く知るために各テーマに進んでもらう、いわば基本展示室の目次のような場所であることからアエキルシと呼ばれることになりました。

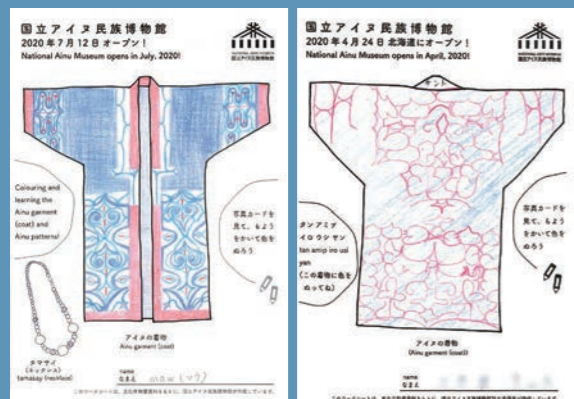
(研究員 小林美紀)



国立アイヌ民族博物館で行われている教育普及プログラムや、教育普及のツール、教育展示「探究展示 テンパテンパ」などについての話題を取り上げます。今号と次号では、博物館の教育活動のために開発したワークシートをご紹介します。



着物のぬりえワークシート



ぬりえの作品例



ぬりえのあとに実物の着物をぜひ観てみてください (撮影:丹青社)

着物のぬりえワークシート

「着物のぬりえワークシート」は、博物館が2020年7月に開館する前、設立準備室の時代から試行を重ねて作り始めたワークシートです。A5サイズで、着物の背の面と表の面、そして文様／模様／紋様(以下「文様」)の柄があるものとなしもの、計4種類を用意しています。見本の写真や図書資料などを見ながら、できるだけとの図柄に忠実に着物に色をぬるのもよいですし、見本を見ながら自分でがんばって文様を描いてみたい、という人は柄なしのぬりえに挑戦することもできます。

このぬりえワークシートは、見本にそってぬっていくだけでもかなり集中できますが(真剣にぬると30分以上かかることも)、ぬりえを自分の手でぬってみたい後に、展示室の着物の資料やそこに施された文様を覗いてみたり、探究展示のユニット(「テケカラペ:シリキ 手しごと:文様」、「アミブ 着物」)を体験してみると、着物や文様の文化により深くふれられると思います。

現在ぬりえは展示室内での設置・配布となっていますが、来館者のかたがたに開館以来のべ9万3千枚を手にとっていただきました。自宅に戻られたのちも、博物館やウポポイでの体験を思い出しながらぬりえを描いていただけたら幸いです。(研究主査 笹木一義)

※文中の探究展示のユニットについては、「アヌアヌ」11号に紹介記事があります。※このワークシートの開発についての詳細は、『国立アイヌ民族博物館研究紀要』第1号、80～101ページの、「国立アイヌ民族博物館の教育普及ツール開発I:着物のぬりえワークシート」に記載があります。ウェブサイトからご参照ください。



ぬりえワークシート試行の様子(2019年、東京)

ぬりえワークシートは、探究展示t.3エリアで配布しています

❖ 教育普及活動報告 ❖

ライブラリ特設コーナー「本でめぐるアイヌ文化2023」2023.1/31(火)～3/12(日)

基本展示室の6つのテーマ展示と博物館の活動について理解を深められる本を、当館の研究者・学芸員が選書しました。選書した22冊とあわせて、より具体的に展示とつなげて見ていただけるように、推薦のコメントやおすすめのポイントを記載したパネルやしおりも設置しました。



ライブラリ特設コーナー

ミニトークイベント 2/18・25、3/4・11(土)開催

開設期間中、ミニトークイベントを4回開催しました。ミニトークイベントでは選書のうち11冊の本について取り上げました。各回では、それぞれ選書した研究者・学芸員が、展示のテーマや自身の専門分野にもふれながら、研究学芸職員ならではの視点で選書のおすすめポイントをご紹介します。



研究学芸職員がおすすめする本を紹介しました

ライブラリはどなたでもご利用いただけます。当館へお越しの際はライブラリへお立ち寄りいただき、ぜひご利用ください。(エデュケーター 今野彩)

Report 1

視覚障害者の鑑賞支援・体験型プログラムの開発と実践

「ユニバーサル・ミュージアム」＝「誰もが楽しめる博物館・美術館」をキーワードに、障害者も健常者も、そしてさまざまな感性・特性を持つ人たちが芸術や文化、歴史に気軽にアクセスできる取り組みが各地で進められています。そもそも博物館は、人間の五感の中でも、視覚による価値観が重要視され、「見る」「見せる」ことが大前提とされています。そこで、視覚以外の感覚を活用した、解説資料や体験型プログラムの開発を開始しました。3月24日には札幌市視覚聴覚障がい者情報センターのご協力のもと、視覚に障害をもつかたがたを対象とした出前講座を実施しました。今回は初めに触図を用いたアイヌ文化の紹

介、そしてアイヌの楽器である「ムックリ」(口琴)や狩猟の道具などの民具資料をさわって観察し、それぞれの素材や使い方などについて学ぶプログラムとしました。参加者のかたがたと一緒にムックリや民具をさわりながら、素材の手ざわりや楽器の鳴り方、道具の使い勝手などについて、感想やさまざまな疑問を聞くことで、普段視覚情報に依存していると見逃している多くの気づきがありました。また、この数年「さわること自体が難しい状況だったから



民具や素材の触察を行いました

こそ、改めてさわるからこそわかる、新たな世界が広がるかもしれません。ウポポイには博物館のほかにいるいろいろな体験ができる施設があります。目で見るだけでなく、触覚、聴覚、嗅覚、味覚を研ぎ澄ませて、あらゆる感覚で誰もがアイヌ文化を楽しめる展示やプログラム作りにも今後取り組んでいきます。(研究主査 宮地鼓)



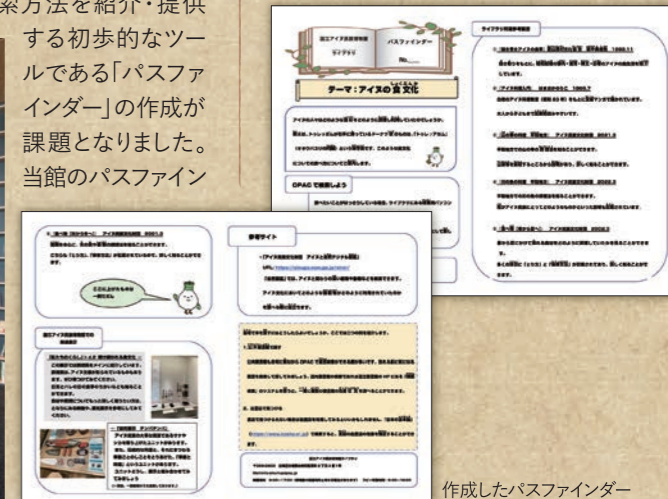
Report 2

内なるMLA連携に向けたライブラリ機能の強化に関する基礎的研究

カンピソシ ヌカラ トウン 国立アイヌ民族博物館ライブラリは、博物館に併設された図書室であり、アイヌ文化やその歴史を取り上げた書籍を中心に「開かれた専門図書室」として位置づけられています。(カンピソシ「本」、ヌカラ「～を見る」、トウン「部屋」という意味です。詳しくはアヌアヌ9号5ページをご覧ください。)この

ような当館ライブラリの特徴から、博物館(Museum)、図書館(Library)、文書館(Archives)の間での連携(MLA連携)に関する研究を進める必要がありました。そこで、他館のMLA連携の現状について調査を行った結果、以下の三種の連携のあり方が見えてきました。①共催イベント、②展覧会関連図書の展示、③レファレンスの連携:その一環としてのパスファインダー(調べ方ガイド)。当館ライブラリでは、①については検討事例の収集を継続し、②についてはすでに複数回の特別展示、テーマ展示ごとを実施していますので、③の、利用者に対して特定の主題に関する各種情報資源や探索方法を紹介・提供

する初歩的なツールである「パスファインダー」の作成が課題となりました。当館のパスファインダーでは、「図書館的」レファレンス:問いの答えを直接示すのではなく、答えに至るための図書の調べ方を提示する、「博物館的」レファレンス:研究者・学芸員等の専門の見地から質問の答えを提示する、を組み合わせることが重要であると考えています。アイヌ民族やアイヌ文化についての知識を普及することを使命とする当館においても、「正しい知識」を一方向的に発信するばかりでなく、利用者の側も主体的に調べ、学ぶという双方向的な知識のやりとりが必要だと考えています。(研究主査 関口由彦、研究主査 笹木一義、司書 工藤綾華)



作成したパスファインダー

ウポポイ(民族共生象徴空間)、ArCSII 沿岸環境課題、
北海道立北方民族博物館 コラボイベント

動物の毛皮に触ってみよう

—アイヌ民族と北方民族の毛皮利用を知る・触る—

会 期：2023(令和5)年5月27日(土)・28日(日)

会 場：1階 交流室など(詳しくは、当館ウェブサイトをご覧ください)

観覧料：無料

昨年盛況だった毛皮イベント第2弾! 北海道、グリーンランドなど各地から集めた30点以上の毛皮資料を通して、寒冷地の文化やその背景にある交流の歴史について学べます。



ウポポイ こんな
とこ9

春のウポポイを楽しもう!!

4月1日からグリーンシーズンに突入!
気持ちのよい空の下で楽しめる屋外プログラムも続々登場しました。
今回はその一部をご紹介します。

グリーンシーズン
プログラム一例



文化解説プログラム「ウパシクマ」
コタンでの暮らしぶりの解説や歌と踊りなど、伝承されてきたアイヌ文化を体感。



弓矢体験「アクシノツ」

アイヌに伝わる弓矢を使った遊び。専用の安全な矢でどなたでも楽しく体験を。

敷地内にもすっかり緑が見られるようになりました。湖や森、広い空の豊かな自然に囲まれたウポポイは、春らしいポカポカ陽気に包まれています。そんな自然の中に響き渡るアイヌの楽器の音色や舞踊の掛け声は、ウポポイの名物のひとつ。子どもたちの歓声も重なって、春のウポポイは、はつらつとした空気でいっぱいです。



丸木舟実演・解説

チブ(丸木舟)の操船方法や利用について解説とともに実演。



今年新登場!

アミプ(衣服)

ボン チセの中で
アミプ(衣服)の試着体験!
刺繍などの技にふれてみましょう。

自然の中で
いろいろ体験して
ほしいボン!



※天候により中止または会場が変更となります。
※プログラムの詳細はウポポイウェブサイトへ。



NATIONAL AINU MUSEUM
国立アイヌ民族博物館

<https://nam.go.jp/>



ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

■お問い合わせ

公益財団法人 アイヌ民族文化財団(ウポポイ内)

住 所：〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町2丁目3番2号

電 話：0144-82-3914 FAX:0144-82-3685

メール：info@ainu-upopoy.jp

ウポポイにおける新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みや、プログラム等の詳しい情報はウポポイウェブサイトをご覧ください。

ウポポイ 検索

<https://ainu-upopoy.jp/>

